

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：32411

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00380

研究課題名(和文) 十八世紀英詩におけるパーレスクと民衆文化

研究課題名(英文) Burlesque and Popular Culture in the Eighteenth Century Britain

研究代表者

海老澤 豊 (Ebisawa, Yutaka)

駿河台大学・法学部・教授

研究者番号：90298307

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：18世紀英国におけるパーレスク詩の源流となったイタリアやフランスのパーレスク詩を概観した後に、1.嗜好品を主題にしたパーレスク詩(フィリップスの「光り輝くシリング銀貨」、テイトとモットーの飲茶詩、キングの『料理法』)2.ファッションに関わるパーレスク詩(ポーブの『髪の毛略奪』、ゲイの『扇』、ブリヴァルの『服飾の技法』)3.スポーツを描いたパーレスク詩(サマヴィルの『転球場』、コンカネンの『フットボールの試合』、マシソンの『ゴルフ』)4.スペンサー連のパーレスク詩(シェンストンの『女教師』、トムソンの『怠惰の城』)などについて、18世紀英国の民衆文化とパーレスク詩の関係を解き明かした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は『諧謔の詩神～英国十八世紀のパーレスク詩を読む』(音羽書房鶴見書店、2023)として出版した(総ページ数518)。これまで日本ではほとんど論じられることのなかったイタリアやフランスのパーレスク詩の特徴を概観し、その影響下に発展した英国のパーレスク詩(これについても日本では未紹介の作品が多い)を取り上げて詳説した。18世紀英国で盛んに描かれるようになったビール、ワイン、茶などの飲料、当時の英国で流行したベチコートや各種のファッション、英国伝統のスポーツであるボウリング、フットボール、ゴルフ、ボクシングなどが、古典作品のパロディという衣をまとい詩作品として次々と現れたのである。

研究成果の概要(英文)：This study aims to examine the relationship between burlesque poems and the popular culture. The burlesque poems originated as a parody of Homer, and Italian and French poets developed it. The battle scene in the classical epic was transformed into the battle of small animals, and later in England this battle poems found a new way to the sports games. English poets took up various of fashion items and new beverages as their subject of the poems. As a conclusion, poets tried to parody passages in the classical epic, and at the same time they developed the parody into the burlesque which treated sports, fashion, beverages, so a new kind of burlesque poems appeared in the Eighteenth Century England.

研究分野：18世紀英文学

キーワード：パーレスク詩 18世紀英詩

## 1. 研究開始当初の背景

これまで英国 18 世紀の詩歌をジャンル別に概観する研究を続けてきており、その成果は『田園の詩神～十八世紀英国の農耕詩を読む』(国文社, 2005)、『頌歌の詩神～英国十八世紀中葉のオードを読む』(国文社, 2010)、『葦笛の詩神～英国十八世紀の牧歌を読む』(国文社, 2017)にまとめてきた。本研究はその第四弾にあたる。

## 2. 研究の目的

(1) ホメロスに由来する「鶴とピグミーの戦い」と「蛙と鼠の戦い」がバーレスク詩の端緒とされる。これらは古典叙事詩の戦闘場面を小動物の戦闘に置き換えたパロディである。さらにイタリアやフランスではこれに滑稽味を加えた疑似英雄詩が生まれた。タッソー二の『バケツの略奪』(1622)は、ヴィーダの『チェスの試合』(1527)、ボワローの『書見台』(1674)がこれにあたる。これらを参照した英国詩人たちは、ポープの『髪の手略奪』(1714)に代表される男女の色恋沙汰や、スポーツ(ボウルズ、フットボール、ゴルフ、ボクシング)を主題にした「戦闘詩」=「スポーツ詩」を生み出していくことになる。

(2) 18 世紀の英国でもてはやされた新たなファッション(扇、ペチコート、付け黒子、ドレス)や飲食物(ビール、ワイン、茶、英国料理)を主題にした作品群も、古典叙事詩の名残が見られるバーレスク詩であり、当時の民衆文化を取り入れることによって、新たな詩歌の創造に貢献した。またスペンサーの再評価に伴い、スペンサー連を用いたバーレスク詩も次々と書かれた。これは騎士道のパロディという側面を持ちながら、18 世紀当時の民衆文化や風俗を描き出し、政治状況を諷刺する意味合いを兼ね備えていた。バーレスク詩というジャンルによって、詩人たちは従来にはあまり見られなかった、諷刺に滑稽味を加えた詩歌を生み出した。

## 3. 研究の方法

(1) 古典叙事詩のパロディという側面を持つ 18 世紀英国のバーレスク詩は、英雄たちの戦闘場面を男女の争いやスポーツの勝負という卑近な題材に置き換えたが、その根底には叙事詩的な表現や筋立てが透けて見える。彼らがいかに古典を受容しながらも、18 世紀の英国という風土に似あうような作品を生み出していったかを考察した。

(2) 18 世紀のバーレスク詩で目立つのは、対外貿易によって英国にもたらされた新たな嗜好品の流行であり、大陸から伝来した目新しいファッションの広まりである。これらの受容を丹念に調べることで、詩人たちが何に興味を示したのか、読者はどんな詩を求めていたのかを考察した。

## 4. 研究成果

(1) 紀要に発表してきた論文は『諧謔の詩神～英国十八世紀のバーレスク詩を読む』(音羽書房鶴見書店, 2023)として公刊した。これまで日本ではまったく閑却視されてきた詩作品を丹念に読み解くことで、18 世紀英文学の知られなかった側面を明らかにすることができたと自負している。バーレスク詩というジャンルは従来ほとんど論じられることがなく、またバーレスク詩を 18 世紀英国の民衆文化と結びつけて論じるという研究も、欧米では単著の論文としては時に見かけるが、日本では皆無であったと思われる。

(2) 英国詩人たちは古典詩人(ホメロスとウェルギリウスが双璧)を読み、英訳もかなりの数にのぼるが、その戦闘場面をパロディあるいはバーレスクとして自らの作品とする際に、イタリアやフランスの先例に倣うことが多かった。タッソー二の「略奪」という主題はポープの『髪の手略奪』やジェイコブの『スモックの略奪』(1717)に受け継がれ、ヴィーダの『チェスの試合』はジョーンズの「カイツサ」(1772)、ベラミーの『バック・ギャモン』(1734)などの「ゲーム詩」を生み出す契機となった。さらにボワローの『書見台』(1701)は些細な争いに起因する僧侶同士の争いを描いているが、これはガースの『薬局』(1699)やポープの『髪の手略奪』などの疑似英雄詩へと変容していく。

(3) 上記の「戦闘詩」はやがて血の流れないスポーツの試合に置き換えられるようになり、ディリンガム(1678)、アディソン(1698)、サマヴィル(1727)のローン・ボウルズを主題にした詩が生まれた。この区分にはコンカネンの『フットボールの試合』(1720)、マシスの『ゴルフ』(ゴルフ)

フ) (1743)、ホワイトヘッドの『ジムナジアッド、すなわち拳闘の試合』(1744)が書かれた。これらは18世紀英国において民衆に大いに愛された競技であるが、現在とはかなり異なる規則で実施されたことが興味深い。たとえば『フットボールの試合』では審判なしの6人対6人で行われ、どちらかが1点取れば競技は終了する。また『ジムナジアッド』では投げ技や締め技なども披露されるのである。競技場面では古典叙事詩を思わせる描写も頻出する。

(4) 大陸から輸入されたファッションに関する作品も少なくない。詩人たち(すべて男性)は女性の目新しいファッションに目を奪われながらも、当時の社交界の掟などについて事細かに語っていく。古典叙事詩の痕跡はほとんどなくなってはいるものの、男女の交際や恋愛の手管については、古代の英雄たちの駆け引きが彷彿と浮かび上がる。また「ファッション詩」で注目すべきは、扇やパトン(底上げ靴)の「発明」について物語が語られる点である。これは「アキレスの盾」など古代叙事詩のモチーフを借りたものに相違ない。

(5) 嗜好品(酒類や茶)を主題にしたバーレスク詩も見逃せない。フィリップスの「光り輝くシリリング銀貨」(1701)はミルトンのブランク・ヴァースを用いて、借金取りにおびえる詩人がパブでビールを飲むことを夢想する詩である。テイトの『万能薬』(1700)やモットーの『茶に関する詩』(1712)は、18世紀初頭では珍しかった茶を描いた作品であり、茶の効用を歌い上げるために古典神話を借用した独自の物語が捏造されている。フェントンの『穀物酒』(1706)とゲイの『葡萄酒』(1708)は、フィリップスの『林檎酒』(1708)と並んで18世紀初頭における三大飲酒詩であり、当時の酔漢どもの酩酊ぶりが赤裸々に描かれている。キングの『料理法』(1708)はホラティウスの『詩論』をパロディにした作品群の一つであり、フランス料理を称賛するリスター博士に宛てた皮肉に満ちた散文書簡と合わせて、ノスタルジーを込めながら英国料理のすばらしさを韻文で歌った作品である。

(6) スペンサーの『妖精の女王』は長らく閑却されてきたが、ヒューズが1715年に『スペンサー作品集』を編纂したことで、騎士道や中世趣味に対する関心が高まった。ポーブの「横町」(1727)は夢幻的なスペンサー連を用いて、イーストエンドの猥雑な風景を描くという離れ業をやったパロディである。エイケンサイドの「ヴィルトゥオーソ」(1737)は当時の流行であった素人学者をあげつらった作品であり、スペンサーのエピソードを借りながら、似非博物学者の生態を見事に描出している。シェンストーンは『女教師』(1737, 1742, 1748)において故郷で師事した女教師の憤ましいが暴君的な側面も持ち合わせた姿を活写している。トムソンの『怠惰の城』(1748)は、スペンサー風の「技芸と勤勉の騎士」が英国を怠惰に陥れる魔法使いアーキマーゴを退治するという筋立てだが、怠惰の城に囚われているのはトムソンや友人たちに他ならない。詩人は騎士の活躍を讃えるものの、本心では怠惰に対する未練が滲み出ているという作品である。

(7) 18世紀前半におけるバーレスク詩は、古典叙事詩などのパロディという面に合わせて、当時流行していた民衆文化を前面に押し出した作品群である。詩人たちは女性に心惹かれ、酒を食らい、スポーツに熱狂する一般庶民の姿をありのままに描いており、あたかもホガースの風俗画を思わせる。これまで日本ではまず知られていなかったバーレスク詩を紹介できたことで満足である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 海老澤 豊	4. 巻 62
2. 論文標題 ポーブの「横町」 スペンサー模倣について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 駿河台大学論叢	6. 最初と最後の頁 現在不明
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15004/00002378	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 海老澤 豊	4. 巻 60
2. 論文標題 テイトとモットーの飲茶詩を読む	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 駿河台大学論叢	6. 最初と最後の頁 79-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15004/00002200	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 海老澤 豊	4. 巻 61
2. 論文標題 マシスの疑似英雄詩「ゴフ」（ゴルフ）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 駿河台大学論叢	6. 最初と最後の頁 25-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15004/00002249	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 海老澤 豊	4. 巻 58
2. 論文標題 コンカネンの疑似英雄詩「フットボールの試合」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 駿河台大学論叢	6. 最初と最後の頁 175-183
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15004/00002054	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 海老澤 豊	4. 巻 59
2. 論文標題 アディソンとサマヴィルの疑似英雄詩「転球場」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 駿河台大学論叢	6. 最初と最後の頁 81-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15004/00002115	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 海老澤 豊	4. 巻 56
2. 論文標題 パーネルの「蛙と鼠の戦い」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 駿河台大学論叢	6. 最初と最後の頁 177-183
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15004/00001888	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 海老澤 豊	4. 巻 57
2. 論文標題 アディソンの「ピグミーと鶴の戦い」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 駿河台大学論叢	6. 最初と最後の頁 160-167
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15004/00001963	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 海老澤 豊
2. 発表標題 18世紀英国におけるパーレスク～戦闘詩を中心にして
3. 学会等名 日本ジョンソン協会関西支部例会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 海老澤 豊 「ジョージ・キートの『アルプス』を読む」	4. 発行年 2021年
2. 出版社 音羽書房鶴見書店	5. 総ページ数 431
3. 書名 緑の信管と緑の庭園	

1. 著者名 海老澤 豊	4. 発行年 2023年
2. 出版社 音羽書房鶴見書店	5. 総ページ数 518
3. 書名 諧謔の詩神～英国十八世紀のパーレスク詩を読む	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------